

七月十七日

小さな仕事があ、幾つか増えるので、事務所の態勢を整え直すなくてはならぬ。

妙高寺会館の進め方を考える。観音寺、聖徳寺、妙高寺と三つ目の寺のプロジェクトだ。佐藤健の手引きなのかな。十三時教室会議、学部再編の件が中心。十五時教授会に久し振りに出る。白井総長より早大生レイプサークル事件の説明があつた。学部再編は十一月に議決となる。中川研で博士論文の審査会。十八時過高田馬場で数名の教授で小会談。

京都の古山修一さんからメールいただく。今度京都に立ち寄る機会があればお目にかかりたい。

七月十八日

朝院レクチャー。都市について少々述べる。まだ上手に話される段階ではないのは自覚している。最近大学の問題に関わり過ぎているな。

世田谷の柴原よりFAXで新製品の名前候補を送ってくる。葩(は)かさねを選ぶ。平安時代には「おしゃれ」という意味があつたそう、重ね着という意味だと言つ。

楊馥妃の博士論文「近代中国・台湾・日本の迎賓館庭園の比較研究 ナショナル・アイデンティティは造園に如何に表現されたか」中国清華大学に同じような事をやっている人がいるようだ。

国家級の政治中心広場比較研究、朱清模。読んでみるとまだ荒いもので、楊の論文はより精妙である。

十四時半、コンバーション西早稲田の打合わせ。基本方針を決め、野村以下三名に進めさせる。

開放系技術教本。道しるべとしての事例集の編集作業を始める。フェイズ3・D、アポロ13号事故のディテール、ロビンソン・クルーソーの家、南極昭和基地、クリストファー・アレギザンダー・イン・ペルー、バツキー・フラー・イン・チャイナ、から始めた。

十七時前京王線車中。向いのシートにじやりが三名。皆立派で派手なスニーカーをはいている。このスニーカーの明らかな装飾性は何処から生み出されているのだろう。Tシャツのキャラクタ―はウルトラマンだから、きつとその周辺なのだろうが。

夜世田谷村日用品の打合わせ。聖徳寺その他諸々の打合わせ。石山研のHPは住宅のページがそれ程読まれていないことが判明した。よくよく見直してみれば全く魅力のないページで、こんなモノをよく垂れ流していたなと反省する事仕切りだ。一気に作り直すのは不可能だろうが、今日から少しずつ手を入れ直すのは始めた。

七月十九日 土曜日

朝富永譲から頂いたル・コルビュジエ建築の詩読む。富永は私とは明らかに異なる感性抒情の持主だが、ここにきて彼のコルビュジエ研究に建築の詩とサブタイトルを附した、その点に富永の建築家としての未来の形が、と言うよりも彼の清澄な理想が示されている。しかし、第三章、主体の複数性コルビュジエと現代の章の書かれ方は不満である。ル・コルビュジエ的建築の生成のさ

れ方と、今はハッキリと断絶している。コルビュジェの生きた時代と今は建築を支えるMONEYの本体の意味が異なっているのだ。資本は徹底的に自動成長と消失の二ヒリズムをそれ自体が生きる様相を呈している。コルビュジェの建築を建てさせた、私的な詩の余白は今はない。輝く都市はすでに闇の都市へと変化している。十二才の子供が四才の子供をショッピングセンターのガレージの屋上から投げ殺す、そんな都市になっているのだ。渋谷では四人もの少女が密室に閉じ込められ、閉じ込めた男がその密室で死体になって発見されるといふ現実が昨日もあった。新聞TVの報道自体が全く浮わついた狂気の連続でもある。ル・コルビュジェはかつて大西洋を大型客船で旅をして初めてニューヨークを訪ねた。マンハッタンは低過ぎると言つた話が残されている。が、そのニューヨークのコルビュジェが初めてヨーロッパにはないモノを視た、その中心の摩天楼。そのシンボルであつたミノル・ヤマサキ設計のワールド・トレード・センターはイスラム原理主義によつてすでに消失させられてもいる。民族・宗教主義的テロリズムという新しい戦争の形によつてである。富永のコルビュジェと現代の認識はその点に於いて、余りにも静的、余りにも自閉的であると言わねばならない。建築の生成と、その建築としての事物の内外に人間そのモノがありたい、と言つのが、富永のひかえめに書かれようとした意志なのだろう。しかし、そんな詩はあり得ない。圧倒的な絶望と不安と、それ等さえも呑み込んでゆく闇しかも人間が人間として作り出そうとしている闇を直視する事から、それだけが建築を生み直す契機になるだろう。梅雨のうつつとらしい最中に、富永の本を読み、一抹の清涼を感じ、同時に大きな不足も感じたので、その感想を述べておきたい。しかし、富永譲とは十年に一度か二度会うか、会はぬかの仲であるが、一冊の

書物を読む事で、そんな空白は埋められるものだ。これからもなるべく、会わずに過ごしてゆこう。私の如き成熟を期待できぬタイプの人間の、それでもエレガントでありたい親交の形式は、富永の如き日本的成熟が約束されているような人間とは、そういう事になるしかない。

十一時地下に降りる。七名の人間が居る。大学のN棟にほぼ同数が居て、今の私の仕事を支えている。十五名の小さな集団をどんな風に統率して、しかも自由を確保するかに細心の、しかも現実的な工夫が必要だ。設計事務所の如きものを始めて、もう三十二年になるが、ズーツとそれが一番の難問ではある。川合さんの自由は徹底した個人であり続け、決して組織らしきを持つとうしなかつた事にあるが、又それが彼の限界でもあつたのだ。

十四時研究室OG松井絵里子来室。九州のOB高木の女房殿である。色々と将来の事を考えているらしく楽しく雑談をした。松井も三〇才を過ぎて、ようやく大人になってきたな。しかし、私の三〇才の頃を思い起こしてみると、実にポー然としてしまう位の馬鹿男だつた。他人に偉そうな事言える筋合いではない。本当に三〇才の頃の私と言えば、幻庵を作り終えて、開拓者の家の現場に通い始めたばかり。どうやって喰つていたのか定かではない。多分喰べてはいなかつたんだろう。女房は本当に米が無い、米が無いと毎日の様に言つていたし、水飲んで、塩なめて暮らしていた様な記憶もある。でも弱らなかつた。高木も松井もそんな事は無いようだから安心だ。でも、一度そうなつてみたら、その時考える事は本当にリアルなレベルに達するようない気もするけれど。なる必要は全くないけれど、私の場合は、本当に貧乏したから、楽しかった。今も、そんな頃と本質的には変わらぬ生活をしているし。駆け廻っていた原っぱや、高原が世田谷村という人工物にな

っただけの事だ。十六時四十五分友岡社長と会う為に五反田へ発つ。

十七時前五反田TOC内トモコーポレーション。不思議な商売だ。友岡さんの仕事は。世界中の民芸品特産物を一万店くらいある日本中の小売店へとさばっている。私の町づくり支援センターの仕事で大規模に実業化しているようなものだ。美術品の売買と基本的には同じなのだ。十八時過ぎ近くの友岡邸へ。五階建のビルで屋上緑化、太陽光発電を実施し、自邸の電気はまかなっている。立派なものだ。猪苗代の計画に關しても話し合つ。手織物の工房作り位からスタートする事になるのかな。二十二時過世田谷村に帰る。八月中に猪苗代に行き、前進基地の場所を決めようという事になった。いよいよ開放系技術らしいモノが出来るかも知れない。開拓者の家、再来という事か。0シエルトの考えが、プラスされるのが強みだろう。シエルトよりも先に実現される事になる可能性が出てきたな。

七月二〇日

朝日ヘラルド・トリビュン紙のルイス・テンブラード氏より、先日インタビュウされた東京都心の高層ビルラッシュに關する記事が掲載されたヘラルド・トリビュン・インターナショナル送られてくる。

今の都心のハイライズ・ラッシュは誰の眼にも奇異なものとして映っているのだろう。眠れぬままに起き出してその英文記事を読んでいる。深夜三時である。これでは折角の休日が思いやられる。昼は寝不足でボーツとしているのだろう。時々、このような時差ボケ状態に落ち入るな。体力気力共に満足な状態ではないのだろう。五木寛之の他力、谷川健一の魔の系譜読む。何故家に五

木の本があるのか知らぬが、端的に蓮如について書いている処は面白い。が、総じてこの人はノマドとか言ってしまうようなセンチメントにヴァーチヤルなところがあるような気がする。自分でも自覚していて、その自覚が蓮如に託して吹き出ている。谷川健一の本は二〇代に読んだものを再読してみた。全体の構成が随分荒いのと、文章のキレギレさに仰天した。死者の建築について書いてみようと考えて読んだのだが、崇徳上皇の墓陵について沢山アンダーラインが引いてあつて、二〇代の私がこんな事に関心を持っていた事の方が驚きであつた。

七月二十一日

今日も何故か休日である。午後大学へ。野村、セバスチャンを含め六名程と西早稻田コンビジョン、及びひろしまハウス打ち合わせ。彼等が世田谷村と拮抗できる力を持つようになると展望が開けるのだが。猪苗代の0シエルトの建設プログラムを作り始める。

夜世田谷村、月下美人八つ一緒に咲き、匂う。これは生まれて初めての体験だ。あたり一面芳香が漂う。何か良い事でも起きてくれるのだと思いたい。